

乾杯！北京理工大学の学生達！

中 俣 厚 子

1990年3月～1991年1月まで、夫の仕事の関係で北京に滞在する機会を得た。

前半は、6歳の娘と共にのんびりと海外生活を楽しんでたのだが、8月に入り、ひょんなことから私に「北京理工大学」で「日本語」を教える仕事が舞い込んできた。急な依頼ではあったが、生来楽天的な私は「日本語」を通じて中国人と直に接することができるという好奇心で、ひきうけることにした。本当に人生はおもしろい。まったく予想もしていないことが待っているものだ。

ところで、「北京理工大学」というのは、現在、中国の重点大学のひとつになっており、伝統のある理工系の大学であるが、その中に外国語系というのがあり、学生の一般教養の他に、政府機関から依頼された社会人の語学特訓も行なっている。

私が担当したクラスは、今年の6月から日本の企業に研修に来る予定になっている理工系の社会人学生30名（うち女子5名）であった。彼らは、北京はもとより、長春、成都、上海、合肥など、中国各地から選抜されたエリートであり、出身校も、北京大学、清華大学、四川大学、上海交通大学、同済大学など様々であった。

講義の初日、私はドキドキした。私にとって教壇に立つのは初めてではない。しかし、外国人に、そして社会人に、しかも「日本語」を教える仕事は初体験である。彼らの日本語のレベルはどの程度なのだろう、日本人に対してどんな感情を抱いているのだろう、ユーモアは通じるのだろうか等々不安が胸をよぎった。

しかし、教壇に立ってみると、これらの心配は一気に吹き飛んだ。26歳～40歳までの社会人学生達の目はキラキラと輝き、日本語もかなりのレベルであり（何しろ、アジア大会の時に、NHKの通訳のアルバイトをしていた人も含まれている位である）、冗談も通じてタイミングよく笑う。これなら、日本語を細かく文法的に教えるより日本の生活に密着した文化について紹介した方がよい、という考えに変わった。

実際、私は、指定のNHKテキストを使うには使ったものの、テーマと関連づけて、さまざまな資料を配り、日本のいろいろなことを紹介させていただいた。なんだか申しわけない話であるが、日本の学生に教える時よりも、自分自身が不思議なぐらい何倍も夢中になれた。きっと学生達の熱意のせいであろう。語学専門の方とちょっと違った私の教え方は、予想外に学生達に評判がよく、11月からは主任からもう1クラスの特別講義を依頼され、1週9コマをひきうけるハメになった。とにかく忙しい8月～12月であったが、キラキラと目を輝かしながら休み時間になると教卓をとり囲んでたくさんの質問をする学生達、短波放送で聴き覚えただけの流行語を使って私を笑わせにくる学生達——この人達の教師なら一生続けさせていたきたいもの、と思ったくらい幸せな5ヶ月間であった。しかし「一期一会」であり、12月中旬にいろいろな科目の終了試験にパスした彼らは、中国各地の妻子（あるいは夫子）のもとへ帰っていった。

授業以外にも、私の家族をハイキングに誘ってくださったり、自宅に食事に招いてくださったり、宿舍のホテルに餃子作りにきてくださったり……と、今思い出しても目頭が熱くなる程親切であった。1月初旬、四川省成都に旅行した時は、なんと教え子4人全員が職場を5日間も休んで、つきっきりで案内してくださったのには驚いてしまった。

私は、彼らとの出会いによって、何と多くのことを学ばせていただいたことだろう。もちろん、カルチャーショックもあることはあったが、そのことも含めて心から感謝している。

6月から2年間、日本の各地に研修にやってくる予定だが、どうかありのままの日本を見つめて、良き友と出会い、健康で楽しい滞在となりますようにと祈りつつ「乾杯！北京理工大学の学生達！」——。

（26回生）